この『予習シリーズ演習問題集　国語』は、『予習シリーズ』に準拠した問題集で、予習シリーズで学習したあと、学習内容をさらに定着させるように作られています。

各回の構成

○出題文章について

『予習シリーズ』の読解テーマ（学習課題）に対応した、『予習シリーズ』基本問題と同等か、やや難度の高い文章を出題しています。各回の読解テーマに特に関連が深い問題には★マークが付いていますので、かならず取り組むようにしてください。（総合回には★マークはありません。）

○設問について

予習シリーズと同様、選択問題、ぬき出し、記述問題をバランスよく配置しています。答えのヒントはすべて文章中にあります。問われた部分に対応する内容や表現が文章中のどこに書かれているかを発見し、その内容を理解するトレーニングをします。

総合回

予習シリーズと同じく、5回に1回程度、復習のための『総合回』があります。『総合回』の問題は通常回と異なり2文章になりますが、難度の差は設けていませんので、両方の文章にチャレンジしてください。

解答と解説

問題を解いたら必ず答え合わせをしましょう。選択問題は、なぜそれが正解なのかを説明できなくてはいけません。自信がなければ、正解した問題でも解説を読んで、他の選択肢が×になる理由を確認しておきましょう。記述問題は、模範解答と同じ解答要素をおさえていれば、別の言葉で表現してもまちがいではありません、模範解答と答案を見くらべ、過不足がないか確認しましょう。

第2回　物語・小説(2)　心情②

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三学期がはじまって、新しく委員の選挙が行われた。やりたい人は決まっているので、だいたい適当にやって済んでしまうのだが、今回だけは違っていた。選挙の日、私は朝からコチコチだった。これで幸せになれるかどうかが決まるのだ。私は心臓をドキドキさせながら椅子に座っていた。

「はい、次は図書委員を決めます。まず、立候補したい人」

先生はクラスを見渡した。

(いまだ!)

私は目をつぶって、勢いよく手を上げた。

「おお」

①クラスの中がどよめいた。そっと目を開けると、前のほうでヒトミちゃんが手を上げ、ものすごい形相で私の顔をにらみつけていた。

「今回は二人ですね。他にいませんか。それじゃ、この二人のどちらかに投票して下さい」

「先生!」

ヒトミちゃんが口をはさんだ。

「ヨコヤマさんは、本が好きじゃありません。本が好きじゃない人は、図書委員になる資格はないと思います」

夏目漱石の伝記を一ページも読まないで返した私は、[1]した。

「おっかねぇなあ、あいっ」

誰かが[2]いった声が、クラスに響き、みんながゲラゲラ笑い出した。

「何よ!　ふざけないで」

ヒトミちゃんはそういい放って、やっと席に座った。

「ま、とにかく選挙をすることにしましょう」

ヒトミちゃんは肩で息をしながら、まだ私をにらみつけている。どうしてあなたは、図書委員に立候補したのと問いつめられたら、返事ができない。紙が配られ、みんなは鉛筆でこちょこちょと、二人のうちどちらかの名前を書き込んでいる。②私はヒトミちゃんの名前を書いて投票した。黒板には私とヒトミちゃんの名前と、下に正の字が書かれていった。だんだん私の名前の下の正の字がふえていくにつれ、③ヒトミちゃんの耳が赤くなっていった。

「以上です」

開票の結果、ヒトミちゃんには五票しか入っていなかった。

「何よ、ホントに、もう。何ったら、何よ」

ヒトミちゃんは、わけのわからないことばをつぶやきながら、ぶりぶり怒っていた。④不純な動機が、ヒトミちゃんのやる気に勝ってしまい、私はぼーっとしたまま、放心状態で椅子に座っていたのだった。図書委員会に初めて参加しても、⑤本当はうれしいはずなのに、逆に悲しくなった。ほとんどが委員を何度もやった子ばかりで、場慣れしていた。

「おっ、お前も図書委員か?　大丈夫かぁ」

このあいだ、シモダくんと一緒にいた、口の悪い上級生が私の顔を見て大声を出した。何もいえずに黙っていると、

「本のことを知らなきゃ、図書委員はできないんだぞ」

と、お父さんみたいに説教しはじめた。

「みんなにいろんなことを聞かれたら、ちゃんと答えられなきゃいけないんだ。この本、面白いですか、なんて聞く奴はダメなんだ。わかってんのか。いったい、どういう本が好きなんだよ、お前は」

意地悪な上級生は、しつこく、私に好きな本は何だと聞いた。頭の中には、今まで読んだ本がぐるぐると回っていたが、思い出せるのは五、六冊で、それも名前をいったら、きっと笑われるような、みんなが読んでる童話ばかりなのだ。

「好きな本もいえないのかよ」

⑥彼は呆れた顔をした。

「お前みたいな奴が、どうして図書委員になったんだ。困っちゃうんだよなぁ、変な素人が来るとさ。全部、最初から教えなくちゃならないからな」

彼はひとりでいばりくさっていた。

「やめなさいよ」

五年生の女の子が、うんざりした顔で私たちの間に入ってきた。

「いつもそうやって、いじめるんだから。どうしてそんなことするのよ」

追い払われて、彼が離れると、彼女は私に、

「気にすることないよ」

と声をかけて慰めてくれた。⑦いじめられたときに助けてほしかったシモダくんは、黒板の前でおとなしく事の成りゆきを見守っているだけだった。

「それでは図書委員長と副委員長の選挙を行います」

六年生がそういって、委員名簿と投票用紙を配ったが、私はうわの空で配られた紙を眺めていた。司書の先生と図書委員のまとめ役の先生もやってきた。私がこの紙に書く名前は決まっている。シモダくんは司書の先生と何事か話している。他の委員もこそこそと話をしているけれど、私には誰も話す人がいないのだ。四年生の他のクラスの委員も、

「どうしてこいつが図書委員なんだ」

と思っているに違いない。成績だってふつうだし、目立つわけじゃない。どんな委員だって、それなりに目立つ子がやるものなのだ。私は立候補したときの勇気など、吹きとんでしまって、紙にシモダくんの名前だけを書いて、あとは⑧じっとうつむいていた。

選挙の結果は、二学期と同じで、シモダくんは副委員長を続けることになった。放課後、交替で図書室のカウンターに座る順番を決めたのだが、私は月曜日、それもシモダくんと一緒。そしてさっきいじめられたときに、かばってくれたモリさんも一緒だ。

(よかった……)

ちらっと口の悪い上級生を見たら、腕組みをして椅子の上にふんぞりかえっていた。今まではいちばん嫌いだった⑨月曜日が、大好きになった。シモダくんは、何もかもはじめての私に、貸し出しのしくみや、図書委員の仕事を説明してくれた。ろくに本を借りたことがなかった私は、図書室の中がどうなっているかすら、よく知らないのだ。本の背に貼ってあるシールの番号と棚に書いてある番号をよく見て、きちんと分類された場所に戻すこと、貸し出しカードのチェックをすること。本が汚れたら、すぐ司書の先生にいうことなどを教えてもらった。

【群ようこ「図書室の恋」(『膝小僧の神様』所収)より】

問一　[1]・[2]にはどんな言葉があてはまりますか。最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　ガクッと　　イ　ボソッと　　ウ　ゾクッと　　エ　ギクッと

問二　――線①「クラスの中がどよめいた」とありますが、どんなことに対し、どよめいたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　おとなしいヒトミちゃんが、自分から手を上げて立候補したこと。

イ　立候補者が二人も出るという、いつもとは違う展開になったこと。

ウ　ヒトミちゃんが、「私」のことをものすごい形相でにらんでいたこと。

エ　誰もやりたがらない図書委員に、立候補した者がいたこと。

問三　――線②「私はヒトミちゃんの名前を書いて投票した」とありますが、これはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　図書委員にふさわしくない自分の名を書くのは、気が引けたから。

イ　ヒトミちゃんに後でいじめられるのではと思い、こわくなったから。

ウ　本好きでないことをヒトミちゃんに指摘され、反省したから。

エ　落選が決定的なヒトミちゃんが、あまりにかわいそうだったから。

★問四　――線③「ヒトミちゃんの耳が赤くなっていった」とありますが、このときの「ヒトミちゃん」の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　あまりの自分の人気のなさに、はずかしさを感じている。

イ　自分に意地悪をしたクラスの人たちに、怒りを感じている。

ウ　もう委員をできないのだとあきらめ、さみしさを感じている。

エ　納得できない投票結果を、腹立たしく感じている。

問五　――線④「不純な動機」とありますが、これは具体的にはどういう思いですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　思いをよせているシモダくんと親しくなりたい、という思い。

イ　尊敬している上級生に、いろいろ教わりたい、という思い。

ウ　みんなのために働くことをしてみたい、という思い。

エ　ロの悪い上級生に仕返ししてやりたい、という思い。

問六　「L」(38行め)までで、「私」の気持ちは大きくどのように変化しましたか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　不安→とまどい→感謝

イ　緊張→うしろめたさ→とまどい

ウ　緊張→喜び→安心

エ　怒り→うしろめたさ→喜び

★問七　――線⑤「本当はうれしいはずなのに、逆に悲しくなった」とありますが、悲しくなったのはなぜですか。次のようにまとめたとき、□にあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で文章中からぬき出して答えなさい。

・委員を何度もやって□(一三字)している子ばかりの中で、□(四字)ではない自分が図書委員の仕事をやっていけるのかと不安になったから。

問八　――線⑥「彼は呆れた顔をした」とありますが、「私」のどんなところに対し、呆れているのですか。文章中の言葉を使って二十五字以内で答えなさい。

問九　――線⑦「いじめられたときに～成りゆきを見守っているだけだった」とありますが、こうした「シモダくん」の態度に対し、「私」はどのような気持ちでいると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　いつも見守ってくれていることに、喜びを感じている。

イ　淡い期待を裏切られ、ちょっとがっかりしている。

ウ　弱々しく消極的な態度に、おどろきを感じている。

エ　助けてくれなかったことに、腹を立てている。

★問十　――線⑧「じっとうつむいていた」とありますが、このときの「私」の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自分が場違いなところにいることがつらく、はやく時間がすぎてほしいと願っている。

イ　クラスでの投票の時のように、自分がはずみで副委員長に選ばれることをおそれている。

ウ　ロの悪い上級生のことばを腹立たしく思い、どうやって仕返ししてやろうかと考えている。

エ　自分が委員長に選ばれることをおそれ、なるべく目立たないようにと思っている。

問十一　――線⑨「月曜日が、大好きになった」とありますが、そうなったのはなぜですか。文章中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

問十二　この文章全体を通してわかる「私」の性格は、どのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　心がやさしく、おもいやりがある。

イ　思ったことを行動に移す勇気はあるが、気の弱い一面もある。

ウ　気が強く、誰に対しても強くものがいえる。

エ　何事にも消極的で、人とうちとけることが苦手である。